

新企画

研修医・指導医リレーエッセー④



研修医1年目を終えて



独立行政法人 国立病院機構 岡山医療センター 初期研修医 篠森 一輝

岡山医療センター研修医2年目の篠森一輝と申します。出身は愛媛県。研修医としての1年間の生活を終え、改めてこの1年間を振り返ると、数えきれないほどの多くの学びと経験があったと感じています。昨年4月、岡山大学での6年間の学生生活を終え、我々は大きな期待と不安を胸に医師1年目としてのスタートを切りました。新たな同期との出会いもあり、研修医生活を彼らと支え合いながら、一人前になるための第一歩となるこの2年間を必死に頑張っていこうと意気込んでいたことを覚えています。

初めは現場での判断や行動に戸惑い、何もできない自分の未熟さを痛感する毎日でした。「まずは仕事に慣れるところから始めよう」と上級医に言われ、カルテの使い方や物品の場所、各診療科の決まり事など、日常業務の基本を覚えることに必死に取り組みました。最初の患者さんを受け持たせていただき、病棟指示や治療方針など、分からないことばかりでとにかく周囲の方々に助けを求めて過ごしました。特に研修医2年目の先輩や専攻医の先生方がどんな質問にも丁寧に、熱心に答えてくださり、うまく対応できなかった場合でも共に振り返ってくださる環境があったことに、心から感謝しております。

1年目では内科を中心に外科や麻酔科、救急科と幅広くローテートし、入院患者の病態把握や治療方針について上級医とディスカッションを繰り返しながら知識を深めていくことができました。救急外来では、限られた時間で適切な検査や処置が求められ、初めは上級医に言われるがまま動くことしかできませんでした。先生方の指導に加え、動きや対応を間近で見て学ぶことで徐々に自らの行動や提案にも自信が持てるようになりました。救急外来で様々な疾患の初期対応を経験し、自らの知識や判断力が求められる場面もありました。時には失敗を経験することもあり、その際は何が問題だったのかをきちんと指導医と振り返ることで再発を防ぐよう努めることができました。

この1年間は、知識や手技を習得するだけでなく、医師としてのあり方や姿勢を構築する時間でもあったと感じています。働き方改革が進む中で、「研修医はお客様だ」と言われることがしばしばあります。確かに研修医が自らの判断で診療の決断を下すことは少なく、診療の責任を持つ機会は限られているため、そう思われるのも妥当かもしれません。しかしながら一人のチーム医療の一員として、日々の診察、患者さんとの信頼関係の構築、症例や病態のプレゼン、多職種と関わることなど研修医でも出来ることは多く、時に患者の生命にも関わる判断に迫られる場面もあります。そのため報告、連絡、相談を欠かさず、命を預かる存在として日々学び、研鑽を積む謙虚な姿勢が肝心だと気づき、そのような姿勢や責任感を身につけることができた1年であったと感じております。また、先生方の熱心なご指導に負けないくらい、今後も診療に対する情熱を持ち続け、その姿勢を日々の行動を通じて示していくことで、指導の時間や機会の捻出が難しくなっている時世の中ではありますが、限られた時間でもご指導いただき、成長できるよう頑張っていこうと思います。

2年目になり出来ることが増え、専門的な知識や手技の習得を追い求めていくだけではなく、この1年で得た経験や姿勢を基盤とし、「初心を忘れず」、これからも研鑽を積み重ねていきたいと思っています。



「鹿田レガッタ」に出場した岡山医療センター研修医で結成したチーム。応援に駆け付けた柴山卓夫院長（前列中央）とともに。柴山院長の真後ろが筆者。2024年6月、岡山市中区沖元の百間川河川敷で

総合力と専門性、臨床研修のすべてがここにある

独立行政法人 国立病院機構 岡山医療センター 教育研修部長 清水 順也

NHO岡山医療センター教育研修部長の清水順也と申します。小児科医です。よろしくお願いいたします。

岡山医療センターでは、教育研修部の中に医師育成キャリア支援室という部署があり、初期臨床研修指導に関する業務や相談を行っています。前回のエッセーで拝見した津山中央病院さんの卒前卒後臨床研修センターと似たような位置づけかもしれません。こちらの室長も清水が担当しています。アドバイザーとして前室長の太田徹哉副院長と太田康介統括診療部長、室員は各診療科からの研修医指導に情熱を持つ精鋭医師で構成されています。院内評価を脳神経内科の奈良井恒先生、PG-EPOCを糖尿病内分泌内科の片山晶博先生が主に担当し、クラーク山本さんは、お姉さんの立場で研修医の公私にわたるサポート役を担っています。

当院は33の診療科を有し、それぞれに高い専門性と総合力で診療を行っており、初期臨床研修を行う上で不足の無い環境にあります。一方で、働き方改革やハラスメント防止対策により、指導医からの厳しい指導が減り、従来のような否が応でも経験が積みあがる環境ではなくなりました。成長するためには研修医自身に高い自主性が求められる時代へと変革しています。

先日、新初期研修医1年目全員（残念ながら1名当日病欠）と引率の指導医とで、国立ハンセン病療養所の長島愛生園と邑久光明園を訪れてきました。両園の園長先生や入所者の講話を伺い、ハンセン病当事者の生活やとりまく状況、歴史的な推移やその背景を学ぶ機会を頂きました。研修医それぞれにとって、医療の結果として患者さんの人生にどう影響していくのかなど、医師の責務を考える一つのきっかけとなったと思います。

責任とプライベート、究極的には相反しそうなこれらに指導医としてどうバランスをつけていくのか、悩みながらではありますが前進していきたいと思っています。